

『手は嘘をつかない』

絵本作家の中川洋典さんが、被差別部落の伝統産業である皮革産業を題材にした人権総合学習絵本『太鼓』の作画依頼を受け、取材で太鼓作りの現場に行った時のことを次のように述べられています。特に、感銘を受けたところを要約または抜粋して紹介します。



学習絵本 「太鼓」

文：三宅 都子

絵：中川 洋典

太鼓職人の世界というものを初めてみせてもらった時の衝撃は今も体の中に残っている。作業工程は、どれも集中力を必要とされるもので、視覚だけでなく、指先や音によって情報を掴むことで品質を上げていく、まさに個の技能が全てを決める世界だ。見ていて「うわっ！」と思ったのは、職人さんの手である。職歴50年のベテランの指や手の甲、手首の関節は太く、同じ男として憧れるような手だったことを覚えている。(略)疑問に思ったことを質問すると初歩からわかりやすく、それも「教えてやる」といった上から目線ではなく、同等の立ち位置で、しかも敬語で一つ一つ丁寧に答えてくれた。太鼓職人としての誇りについて尋ねた時は、「それは内にしまっておくもの。一言でも口に出して人に聞かれたら、その瞬間に失われてしまう。」

この謙虚にして厳かな姿勢。ものを作る仕事に対する愛情、心構え、厳しさ、手応えの話を聞いたことは、今もわが身を照らし合わせる時のものさしになっている。

この絵本は、太鼓の作り方から演奏方法、歴史までわかるものです。太鼓は、動物の皮革からできます。絵本からは、「人権・命」そして、「職人」さんの仕事への思いがわかります。中川さんは、絵本を描くために、それを知るために聞き取りをされています。

何よりもあの手だ。握った時のこぶしの隆起、指先にめり込んだ爪。太鼓作りを50年以上続けて、もうこれ以上はないという性根、辛抱、礼節、道徳心が宿った手だ。かつては、「あの手」をした大人が日本にはたくさんいた。物作りで産業を支えてきた国だから。そういう大人がいたる所で消えてしまっていて、人権を大切にしているというけれど、挨拶もろくにできない、目上の人に対して敬語も使えない、お金と効率で何でも解決できると勘違いして、いざ困難がやってきたら思考は停止、ただただ責任から逃れたがる、そんな大人ばかりが増えた気がする。

私たちの生活には今、溺れそうなくらいに過剰な情報が入り込み、その反動で個々人の価値観や信条は、いとも簡単に揺らぐのだと思う。誰もが身近に信頼できる何かを欲しているのを感じる。そんな時私は、あの職人さんたちの手を思い出す。その人がどんな時間を過ごしてきたのかを雄弁に物語る手を。そして遠く及ばないことは百も承知で、あの手になんか少しでも近づきたいと願う。

太鼓づくりの職人さんの「手」から、人権の基本を学ぶことができます。「生きた動物」の皮から作る太鼓だから、本物の「人権」を学ぶことができるのではないのでしょうか。

手は嘘をつかない！！